

2008年度日本政府(文部科学省)奨学金留学生選考試験

学科試験 問題

(日本語・日本文化研修留学生用)

日 本 語

注意 ☆ 試験時間は 120分。

☆ 答えは全て 解答用紙 に記入すること。

I _____に入るもっとも適当なものをA～Dの中から一つ選んで、その記号を解答用紙に書きなさい。

問1 [れい] 日本には来年の3月_____いるつもりです。

A に B まで C でも D で

1 日本_____人気のあるスポーツを教えてください。

A で B に C を D へ

2 日本の人口は中国の人口_____約10分の1だそうだ。

A より B と C の D から

3 先週起きた地震_____100人以上の死者が出た。

A に B で C から D を

4 企業は利益^{ついきゅう}追求_____ならず、社会^{こうけん}貢献についても考えるべきだ。

A しか B だけ C のみ D ばかり

5 おなかが空^すいたから、ラーメン_____なんか食べに行かないか。

A を B と C など D か

6 この漢字の_____^{かた}方が分かりません。

A 読む B 読んで C 読め D 読み

7 子供のころ、川で溺^{おほ}れて_____そうになったことがある。

A 死に B 死ぬ C 死んでい D 死んだ

8 予習を_____授業に出てくる学生が増えてきた。

A せずで B しなくて C しなくなって D しなくて

9 これ____、卒業式を終了いたします。

A をもって B として C において D について

10 大学を中退^{ちゅうたい}して仕事をするに何の迷^{まよ}い____なかった。

A か B も C が D は

問2 [れい] 飛行機に乗り遅れたら____です。急ぎましょう。

A とても B ほんとう C たいへん D すごく

1 眼鏡^{めがね}を____、黒板の字が見えません。

A はめないと B 着ないと C かぶらないと D かけないと

2 川口さんは、学生のころトランペットを____いたそうだ。

A はいて B ひいて C ふいて D へて

3 すばらしい音楽を聴^きいたときの感動は、とても言葉では____できない。

A 表明^{ひょうめい} B 表現^{ひょうげん} C 表示^{ひょうじ} D 表象^{ひょうしょう}

4 我が社が____最新設備^{さいしんせつび}をゆっくりとご覧^{らん}ください。

A 自慢^{じまん}する B いばる C 誇る^{ほこ} D うぬぼれる

5 高い物価が____になって、日本へ留学する人がなかなか増えないという。

A ネック B バッド C ダウン D マンネリ

6 その店はテレビや新聞に出たことはないが、____では大変な評判^{ひょうばん}だ。

A タレコミ B ツッコミ C マスコミ D クチコミ

7 言いたいことを全部言ったので、胸が____した。

A かつと B ほっと C すっと D ぞっと

8 10年間_____と貯めた^たお金でやっと家を建てることができました。

- A ちゃっちゃ B せっせ C とっと D さっさ

9 災害^{さいがい}による停電^{ていでん}に対しては、すでに手を_____ある。

- A 使^{つか}って B 打^うって C 出^だして D 抜^ぬいて

10 やはり「_____の上にも三年」で、我慢^{がまん}していればいつかよいことがあるものだ。

- A 石^{いし} B 木^き C 砂^{すな} D 鉄^{てつ}

問3 [れい] 吉田:これは、みんなでしたほうがいいと思います。

山口:_____。やはりあなたがひとりでするべきです。

- A そうでしょうか B そうでしょうか
C そのはずです D その通りです

1 田中:父の古いご友人だそうですね。

山田:はい、お父様が小学生の時からよく_____。

- A ご存じです B 存じております
C ご存じでございます D 存じます

2 店員:ご注文を_____。

客: ええと、カレーライス一つね。

- A もうしあげます B まいります
C おたずねになります D おうかがいします

3 客: ここで写真^とを撮^とってもいいですか。

係員: _____、写真撮影^{さつえい}は禁止となっております。

- A 恐れ入りますが B 失礼ですが
C お世話になりますが D お手数ですが

4 小林：今日は高木が来ていないな。

石井：____、山本も来ていないぞ。二人でどこかに遊びに行ったのかな。

- A そうくれば B そうなれば
C そういえば D そうすれば

5 母親：どうしてご飯を食べないの。

子供：____まだおなかが減^へっていないんだもん。

- A そこで B なぜなら C ゆえに D だって

6 林先生： 鈴木君を叱^{しか}っておいたよ。最近、全然勉強していないからね。

高橋先生：____、あんなにひどく叱^{しか}らなくてもいいだろう。

- A ということは Bなのに
C だからといって D したがって

7 小川：ねえ、中村さん会社やめるそうよ。

上田：____、そうなの。知らなかったわ。

- A へえ B ほら C おい D さあ

8 大田：先生に「試験はないんですよね。」って言ったら、「忘れてた。来週試験をしよう。」って言われてしまった。

中島：それは、____だったね。

- A まゆつば B どろなわ C たなぼた D やぶへび

9 中川：最近、きちんと英語の宿題をやってくるようになったね。

西村：____、アメリカ人の友達に手伝ってもらっているんだ。

- A 実際 B 実は C 実際に D 実に

10 松本：額^{ひたい}に一円玉を貼^はると頭痛^{ずつう}が治^{なお}るらしいよ。

山下：_____怪^{あや}しいな。科学的根拠^{こんきょ}はあるのかい。

A どうせ B どうも C どうぞ D どうか

Ⅱ—1 次の文章を読んで、あとの問1～問8に答えなさい。答えはA～Dの中からもっとも適当なものを一つ選んで、その記号を解答用紙に書きなさい。

一般に本がどのような形で読まれているかということに、私はそれほど関心を持っていません。もっとも、私の書いた本を、どのように受けとったか、ということなら、かなり関心があります。私がおもしろいと思って書いたことが、読者にどのように伝わったか、たしかめてみたい気持ちがあると同時に、これは純粋な技術の問題として、自分でもかなり客観的な評価がくだせるからです。

そんなわけで、近ごろの、親子読書運動や地域文庫運動などが盛んになっていることに対しても、そういう「読書の形」についてはほとんど無関心といってもいいようです。

もともと、作家は他人の気持や考えを忖度^{そんたく}して作品を創^{つく}るのではありません。他人—読者もちろん他人—の意見や考え方を基準⁽²⁾にしてはならないからです。たぶん私の無関心はそのせいでしょう。

それはともかくとして、子供が本を読むことは大変^{たいへん}よいことです。平凡なことをあらたまっているようですが、読⁽³⁾まないより読むほうがどんなにいいかしれないと、私は自分の経験にたづねて思います。でも、読⁽⁴⁾まなければいけない、というふうには考えません。

私の身近にも、子供のころ、本なんか読みたくてもなかった、という人がたくさんいます。そういう人たちが、欠点だらけかといえば、けっしてそうではありません。みんなそれぞれに円満^{えんまん}な人たちです。たとえば、そういう人たちには、情に欠けるところが共通して認められる、というようなことも、さらにありません。ただ、「物語ざらいになる傾向^{けいこう}」が、わずかに見えるだけです。

しかし、その人たちは口をそろえていいです。
⁽⁵⁾

「今の子供たちがうらやましい。ぼくも（わたしも）子供のころに、こんな本を読んでおきたかった」

だから、本は子供のころに読んだほうが、読まないよりずっといいのにちがひありません。そこで、私なりに読書について考えてみました。

本の好きな子がいます。一クラスに五人くらいはかならずいます。逆に本の大きな子というのも同じくらいいます（ことわっておきますが、これは私が生徒だったずっと昔の経験です）。その中間の、好きでもきらいでもない、ただし漫画ならいつでも読む、というのがあとの連中です。そして、こういう比率(6)のようなものは、たぶん今でもそれほど変わっていないのではないかと思います。

しかし、本が好きでもきらいでもない、という中に、ある日突然本が好きになる子があらわれます。その子は、なにかのきっかけで、本のおもしろさ、本の魅力をつかんだのです。以前、私のよく知っている四年生の女の子は、お化けの話を集めただけの古い本で、その魅力をつかみました。ひどい絵の表紙がついた本でしたが、そんな本でも、貴重なキーの役割をはたすことがあるのです。その女の子というのは、じつは私の長女ですが。

だから私は、本は子供に与えるのではなく、子供に本をとらせるような、環境を作るくふうが必要だろうと、とうぜんながら考えつきました。そして、そのための基本条(8)件を三つひろいだしました。

（佐藤さとる『ファンタジーの世界』より）

問1 下線部（1）は、ここではどのような意味ですか。

- A 私の書いた本を読んで、読者がだれと話をしたか
- B 私の書いた本を、読者がどこで読んだか
- C 私の書いた本を、読者がどこから手に入れたか
- D 私の書いた本を読んで、読者がどんなことを考えたか

問2 下線部(2)は、ここではどのような意味ですか。

- A 作家は、作品を書くときに読者のことを考えずに書いてはならない
- B 作家は、作品を出した後で読者の意見を聞いてはならない
- C 作家は、基本的な自分の考えを作品の中で読者に明らかにしてはならない
- D 作家は、読者がどのように読むかを考えて作品の内容を決めてはならない

問3 下線部(3)は、ここではどのような意味ですか。

- A 本を読むほうが読まないよりもずっといい
- B 本を読むのと読まないのと、どちらがいいかは分からない
- C どんな本を読んだほうがいいのかを知ることはむずかしい
- D いい本を読まないなら、まったく読まないのと同じだ

問4 下線部(4)とありますが、筆者がそう考えないのはなぜですか。

- A 本を読まない人は、物語ざらいになりやすいから
- B 本を読まなくても、問題のある人間になるわけではないから
- C 現在でも、日本には本を読むことのできない人がたくさんいるから
- D 本をたくさん読む人は、他人を思いやる気持ちが強いから

問5 下線部(5)は、ここではどのような意味ですか。

- A その人たちは、みんな同じことを言う
- B その人たちは、人によってちがうことを言う
- C その人たちは、自分の考えと反対のことを言う
- D その人たちは、大きな声を出して言う

問6 下線部(6)とありますが、それはどのようなものですか。

- A 一クラスの中の、女の子と男の子の数の割合^{わりあい}
- B 一クラスの中に置いてある本と漫画^{まんが}の数の割合
- C 一クラスの中の、本好きの子と本ぎらいの子の数の割合
- D 一人の子供が一年間に読む本と漫画の数の割合

問7 下線部(7)とありますが、それはどのようなものですか。

- A 本の内容を思い出すための助け
- B お化けについて知るための情報をあたえるもの
- C 古い本を大切に作る心を育てるもの
- D 本のよさが分かるようになるきっかけ

問8 下線部(8)の後ろに、筆者は基本条^{ひつしや}件^{き ほんじょうけん}を三つあげています。A～Dの中でその基本条件として適当でないと考えられるものはどれですか。

- A 大人が子供のまわりにいろいろな本をたくさん置くこと
- B 大人が選んだ本だけの子供に読ませること
- C 子供のまわりの大人も読書^{しゅうかん}を習慣^{しゅうかん}にすること
- D 大人が読書と教育をあまり強く結びつけないこと

Ⅱ—2 次の「アガルとノボル」についての文章を読んで、あとの問1～問9に答えなさい。答えは本文の内容に即して、A～Dの中からもっとも適当なものを一つ選んで、その記号を解答用紙に書きなさい。

てんしゅかく
天守閣の内部に入ってみる。鉄筋コンクリートの柱が雑然と、ひどく殺風景。

こうしえん こうらくえん
甲子園や後楽園のスタンドの裏側^{はつ}みたいだ。この没趣味^{ぼつ}をかえって面白く思い

ながらエレベーターで天守閣^{てんしゅかく}のてっぺんに上った。(岡本太郎『日本再発見』)

(1)

「上った」はアガッタともノボッタとも読める。しかし「上る」が常にアガルでもノボルでもよいという訳ではない。アガルとノボルがどう違っているかをこれから考

えてみよう。その上で冒頭の文の「上った」を見ればどう読んだ方がぴったりするかが「再発見」されるだろう。

まず空間的な移動の場合について考える。

1 a 呼ばれて二階にアガッタ。

b ×呼ばれて二階にノボッタ。

bは階段を使わずに綱^{つな}か何かでヨジノボル場合なら可能かも知れない。

2 a ^{ざしき}座敷にアガル。

b ×^{ざしき}座敷にノボル。

1、2の「二階」「^{ざしき}座敷」は「到達点」である。

3 a ×川をアガル。

b 川をノボル。

「川」は「経路」である。1～3に見る限り、

4 a (到達点) にアガル。

×(到達点) にノボル。

b ×(経路) をアガル。

(経路) をノボル。

となりそうだ。

ところで、

5 a ×山に歩いてアガル。

b 山に歩いてノボル。

は4に反するように見える。しかし、これは次のように考えることが出来る。山にノボルのは単に頂上に達することを目的とするものではない。むしろ頂上へ至る途中経過が大事なのである。ヘリコプターで頂上まで行っても、それはノボッタことにはなるまい。自動車で山にノボルことは出来る。これは途中の景色などを楽しみつつ頂上へ向かうからである。山を到達点であると同時に経路でもあると考える時、ノボルは使えてもアガルは使えないのである。

6 a 階段をアガッテ二階に行く。
(2)

b 階段をノボッテ二階に行く。
(2)

a、bともに可能である。この例で「を」を「に」にすると、a、bともにおかしい

文となる。階段が経路と考えられている証拠である。6 aは4に反する。4はどういう助詞をとるかという形の上からの連語的制限だった。6を説明するには4の制限は強すぎるようである。

そこで次のようにする。

特徴①アガル——到達点に焦点を合わせる。

ノボル——経路に焦点を合わせる。

これは「階段をノボッて二階にアガッた」という例からも支持される。aとbの差は、前者が、階段の上へ達することに重点をおいた見方であり、後者が、階段の下から上までの移動に重点をおいた見方であるということなのである。

動作主体についてはどうだろうか。

7 a 積荷がクレーンに吊^{つる}されてアガッていった。

b ? 積荷がクレーンに吊^{つる}されてノボッていった。

ノボルのは自分で動く力を持ったものである。アガルにはこのような制限はない。b⁽³⁾が不自然なのはそのためである。自分で動く力を持ったものは人間や動物であるが、そればかりではない。太陽、煙などもそうである。逆に人間だからいつでもノボルが使えるかというともうでもない。赤ん坊は山にノボッタリ、階段をノボッタリすることは出来ない。「赤ん坊は二階にアガッた」とは言える。赤ん坊が誰かに抱かれてアガッたからである。

ノボルには次のような特徴も見られる。

8 a 遮断機^{しゃだんき}がアガッた。

b × 遮断機^{しゃだんき}がノボッタ。

9 a さっと五、六人の手がアガッた。

b × さっと五、六人の手がノボッタ。

8、9ともに上昇するのは物の一部分である。8の遮断機^{しゃだんき}は「はねつるべ」式のものを考えて頂きたい。もっとも〈全体〉であるか〈部分〉であるかの別は微妙な場合がある。8の遮断機^{しゃだんき}の場合、動くのは一点のまわりに回転する横木である。この横木の上昇は全体的と言えるかも知れない。そこで、

特徴②ノボル——自分で動き得るものの全体的な移動を表わす。

とする。アガルにはこのような制限はない。

以上は純然たる空間的移動だった。以下、それに加えて広い意味での空間的移動及び慣用語法について探って行くことにしよう。

10 a 大雨で川の水面がアガッタ。

b ×大雨で川の水面がノボッタ。

11 a この線は左が少しアガッテいる。

b ×この線は左が少しノボッテいる。

これらは、ともに〈基点を離れる〉状態を示している。次例も〈基点からの離脱^{りだつ}〉で説明できそうである。

12 湯からアガル。

13 貸家から月々家賃がアガル。

12では〈湯に入っている状態〉を離れるのである。家賃は、店子^{たなこ}を離れて大家^{おおや}のふところに入るのである。また、

14 ^{おおぜい}大勢の前でアガッテしまった。

は、いつもの状態を離れて、ふだんの自分でなくなることなのである。

特徴③アガル——始めの状態（基点）を離れることを表わす。

とすることが出来よう。

アガルは〈非連続的移行〉という特徴を持つ。このことは特徴①から当然予想されることである。

15 a 学校にアガル。

b ×学校にノボル。

学校という到達点に焦点を合わせているからノボルは使わない。また、学校に入学する前後は連続していない、即ち〈非連続的移行〉となるのである。

16 血圧がアガッタ。

17 頭に血がノボッタ。

16では血圧が高くなる経過は分らず、測ってみたら、「急に」高くなっていたのである。それに対して17では、体の中を血が上昇していくのが分る（と感じられる）のである。アガルは非連続的であるが、ノボルはそうでない。

アガルは〈完了〉を示すこともある。

18 a 雨がアガッタ。

b 雨がヤンダ。

bでは雨がまた降り出すかも知れないのに対し、aでは完全に降り終ってもう降りそうもないことを表わす。次の例も〈完了〉という特徴を持っている。

19 仕事は五時でアガッタ。

すごろく まあじやん
双六や麻雀などでアガルのはその人の勝負が完了したことを表わすのである。

以上をまとめて、

特徴④アガル——非連続的移行である。完了を示す。

と出来よう。

アガル、ノボルは〈上〉への移動である。〈上〉というのは相対的な概念であって、頭の方が〈上〉であり、足の方が〈下〉である。重力に逆らう方向を〈上〉とするのはよくない。人間は立って生活するのが普通だから、頭の方、すなわち重力に逆らう方向が〈上〉となるのが通常であるというに過ぎない。従って逆立ちして頭へ血がノボルのは、やはり〈上〉への移動だと言える。現実の物理的世界と言語の世界とは別
(5)
のものなのである。

アガル、ノボルは、上への移動である。上にあるものは目につきやすい。即ち〈顕在化〉するのである。そこで、

特徴⑤ $\left. \begin{array}{l} \text{アガル} \\ \text{ノボル} \end{array} \right\}$ 上への移動である。その結果、けんざいか顕在化する。

以上、アガルに四つ、ノボルに三つの特徴を考えた。基本的（いろいろな語と自由に組み合わせて新しい表現が可能な）意味は、ほぼこれらの特徴で説明されると思う。慣用的な用法が基本的意味とどのように関連するのかを見出すのは簡単ではない。少々苦しいところもあるが、慣用的用法をこれまでに得た特徴によって説明してみよう。

20 火の手（つちけむり土煙・ひめい悲鳴）がアガル。

これは、特徴④⑤によって説明される。

21 あの人のことが噂にノボッタ。

うわさ
噂はパッと広がるものであるが、うわさ噂になるまでには、はじめ一部の人に知られていたことが徐々にひろまるという経過が含まれているのである。従って特徴①⑤で説明さ

れる。

22 伊勢エビが食膳にノボッタ。

エビをイワシにすると何となくぴったり来ない。伊勢エビであればこそノボルのである。食膳に出すまでの経過（金とか料理の手間がかかっているなど）がしのばれるからだろう。特徴①で説明される。

23 能率（碁の腕・効果・名）がアガル。

これらは皆、結果を問題にしている。特徴①で説明できる。

次の句になぜアガルでなくノボルが使われているかを読者各位で考えられたい。

愁ひつつ岡に登れば花 萩 蕪村

(7) (山田 進『言葉の意味—辞書に書いてないこと—』「アガルとノボル」より)

注：

天守閣：城の中心に高く造られた建築物

甲子園や後樂園：どちらも日本の代表的な野球場

遮断機：列車が通るために人や車を止める装置

双六、麻雀：日本で遊ばれるゲーム

問1 下線部 (1) 「エレベーターで天守閣のてっぺんに上った」の場合は、どのように読むとぴったりしますか。また、その理由は何ですか。

- A アガッタ 「てっぺん」と言うことばで到達点に焦点を合わせているから
- B ノボッタ エレベーターでと言っているので、てっぺんに到達することより、上まで行く途中経過が大事であることを表現しているから
- C ノボッタ 一階からエレベーターに乗って行っただと考えられるので、連続的な移行を表現しているから
- D アガッタ エレベーターは、自動的に上昇するから

問2 下線部(2)「階段をアガッテ二階に行く」、「階段をノボッテ二階に行く」の助詞「を」を「に」にすると、おかしくなるのはなぜですか。

- A 動作の目的を表す助詞「を」は、「に」には置きかえられない
- B 助詞「に」が短い文の中に二度も使われている
- C 助詞「に」は経路を表さない
- D 「に」を使うと、空間を移動中に動きが停止してしまう

問3 下線部(3) 全体の意味は何ですか。

- A ノボルは、動作主体が自分の意思で動くことができる場合にのみ使う
- B ノボルは、動作主体がどのような手段によってでも動く場合に使う
- C ノボルは、動作主体が動いている場合に使う
- D ノボルは、動作主体がそれ自体の力で動く場合に使う

問4 下線部(4)「さっと五、六人の手がノボッタ」が使えない理由は何だと説明していますか。

- A 質問の内容によって、手をあげて答えられるかが決まるので、自分で動く力があるとは言えない
- B 徐々に手をアゲタのではなく、さっとアゲタためである
- C アガッタのは手で、体全体の一部である
- D 五、六人の手がアガッタと言っているので、特定の個人の意思で動いていない

問5 特徴⑤で説明できるのは、次のどれですか。

- A てんぷらがアガル
- B 物価がアガル
- C 花火がアガル
- D 頂上にノボル

問6 下線部(5)は、何を意味していますか。

- A 重力の逆らう方向を〈上〉にすることは、言語の世界では表せない
- B 通常〈上〉として考えられているものが物理的に〈下〉になった場合も〈上〉とみなして表現することがある
- C 物理的に〈上〉と〈下〉が逆転することを言語の世界で表現することがある
- D 言語の世界では、〈上〉と〈下〉は相対的な概念である

問7 「けがをした人がかなりの数にノボッタ」という例は、特徴①②⑤のどれによって説明されますか。

- A ①⑤
- B ②⑤
- C ①②
- D ②

問8 下線部(6)が特徴①で説明できるとして、どのような意味になりますか。

- A 時間が経つにつれて、仕事などの能率が良くなった
- B 能率が良くなり、仕事の到達点がより高度のものとなった
- C 仕事などの能率が良くなって、完了するところに到達した
- D 仕事などの能率が一定の水準に達した

問9 下線部(7)の蕪村の俳句「愁ひつつ岡に登れば花^{はないばら}茨」では、岡にノボルが使われているのは、なぜですか。

- A この俳句は、作者が岡に登っているが、なかなか頂上まで行き着けない過程を表現している
- B なんとなく悲しい気持で岡に登って行く途中、花^{はないばら}茨がきれいに咲いていたことを表現している
- C 岡を登って行けば、花^{はないばら}茨がはっきり見えてきて、悲しい気持ちがきえることを表現している
- D 岡に登ってから花^{はないばら}茨を見て、悲しい気持ちがさらに深くなった心の過程を表現している

参考

- 特徴①アガル 到達点に焦点を合わせる。
- ノボル 経路に焦点を合わせる。
- 特徴②ノボル 自分で動き得るものの全体的な移動を表わす。
- 特徴③アガル 始めの状態(基点)を離れることを表わす。
- 特徴④アガル 非連続的移行である。完了を示す。
- 特徴⑤アガル } 上への移動である。その結果、顕在化^{けんざいか}する。
- ノボル }

Ⅲ 下線部(1)～(10)の漢字の読み方をひらがなで、下線部①～⑥のカタカナの部分で、それぞれ解答用紙に書きなさい。

- 1 電でん車しやに乗ろうとしたら小(1)銭ぜがなかったので、両(2)替かするかわりに夕(3)刊かんを買うことにした。
- 2 家のまわりを掃(4)除じよしていたら、隣(5)の家の前で財布けいふをヒロ①ったので、すぐに警察けいさつにトド②けた。
- 3 北海道ほっかいどうはユタ③かな自然しぜんに恵(6)まれており、総面積そうめんせきの約7割を森林がシ④めている。その一方、フユ(5)は厳きびしい寒かんさが続つき、吹雪ふゆや道路の凍結とうけつなどで交通が停止すること多い。
- 4 優れたすぐケンキュウ⑥をするためには、正確かんさつな観かん察さつと緻密ちみつな議ぎ論ろんが必要なのは当然だが、それにもまして重要なのは、素朴そぼくで率直さつちくな疑ぎ問もん(8)に対して常に開かれた心を持つことである。

Ⅳ 次の文章を読んで、あとの問1～問10に答えなさい。答えは、A～Dの中からもっとも適当なものを一つ選んで、その記号を解答用紙に書きなさい。

先ごろ、ある人が来た。この人とは長い知り合いである。その昔、就職の紹介をしたというだけのことがもとで、以来ずっとこちらの安否をたずねてくれる習慣が続いている。だから先日の訪問が特別のものではないのだが、これはいつもと違うのである。

今は就職といえば一大事である。中卒の見習や小店員の就職でも、伝手つてだ閤げだ裏口ぼくだ試験だと大騒ぎだが、まだまだ二十何年前はそれほどでもなかったから、力のない私でも少年一人をなんとか斡旋あつせんすることもできたわけだった。それに出来のいい少年で、当人の学業成績や態度がものをいった。紹介なしでも入れたのかもしれない。紹

介先はあるお菓子のしにせで、下品なところではない。けれども、しにせにつきものの封建色が濃く、それに店代々の名と現在の経済とのつりあいが取れなくなっていて、そと見はりっぱな店つきが内側は火の車、おきまりの主人の家内不和、主人と雇い人との摩擦^{まさつ}、使用人同士の反目などがあって、商売は衰えるばかりだった。そのなかで、彼は夜は夜学へ通い、昼はあじきなく働きながら何年かは勤めていたものの、その年ごろはそうでなくてさえ独立心が盛んになって、ピラミッドのような大きな将来を考える時期である。飽き足りない不満な毎日が我慢できるはずはない。雇い主への反抗と朋輩への抵抗とで激しくいさかいをした揚句^{あげく}、彼は店を去った。彼の見切りはたしかだったともいえる。⁽¹⁾間もなくその店は瓦解^{がかい}して人は皆ちりぢりになった。主人は口ばかりで実際の再起に力は持っていなかった。彼は志すところへ独りで道を切りひらいて行った。通信機関である。そのうち戦争がはじまって拡大した。召集だった。遠く母国を離れ、敵と指呼^{しこ}の間に配属^{かん}されて、身を粉^こに働く日々に生命のなんのと言っているひまはなかった。常にいのちは裸^{はだか}ろうそくより危なく、眼が覚めてようやく昨夜が無事だったことを思い、夜を迎えて辛うじて一日を生き延びたことを思う、そういう連続だった。もともとあまり丈夫でもない彼は心身ともに消耗^{しょう}しつつ病んだ。内地へ送還^{かえ}された。しかし還^{かえ}って来た内地も間もなく戦場となった。罹災^{りさい}した。休める場所はどこにもない。それでもやっと忍苦^{にんこ}して健康をもとへ戻したが、かつて若い日に描いたピラミッドのような大きな希望は潰え、一步一步の着実な行進^{ついで}をはじめよりほかなかった。中途半端な年輩になって、なにもかも新規巻きなおしのかたちになったやりにくさは、たぶん誰でも想像に難くないだろう。

そうしたなかで、彼はずっと通して年に二回あるいは三回の、私への訪問を忘れずに続けてくれたのである。たった一度だけ就職を紹介したという僅^{わず}かな縁故^{えんこ}でしかないものを、しかもその就職は人生のしょっぱなに居心地のわるい不適當な場所を与えられたのだから、あるいは怨^{うら}みに思うということも世間には多い例なのである。人生へ発足の当初に受けた不愉快な経験と、それに続くその後の生活は、どう考えても彼に幸福をもたらしたとは思えないのに、彼はあくまで就職^{あつせん}の斡旋^{わくせん}をしてもらったことは好意であり、そこから生じた苦難はその好意とは別物であると考え、好意はどこまでも忘れようとしないのである。人となりもいいのに違いないが、生来の人となりというより、むしろこれは努力である。この期間の生活は一々見たわけではないが、ま

ったく努力の連続であった模様である。というのは、彼自身がなにも語らなかったし、私のほうも気がひけたり遠慮があったりで、しいて訊^きけもしなかったし、訪ねてくれる年に二三度の雑談のときにそれとなく察^{かん}したり勘^{かん}で感じとったりするだけだったからである。あるとき、ふと、辛さも時間を置いて見ないと、どの程度のものだからかはっきりした辛さは出て来ない。あとになって見れば、なんだ、あんなくだらないことに辛がっていたのかと恥ずかしい場合がたくさんある。だからだんだんの経験で知ったことは、辛さは時に愚か⁽³⁾ということの裏返しだ、と言った。これが私の聴いた彼の感懐のたった一つであるが、こういうまでになるのには、どれだけの苦しみを味わったか。「辛さは愚かさの裏返しだ」と淡々と一言語ることばに、かえってその苦勞の深さが見えていた。つつましいということばは、よく女のひとの態度や氣持の形容に使われるものである。それを私はいつも、この人と話していて感じさせられる。爆発発散することによって進行するのではなくて、つつましく蓄積することによって丈高⁽⁴⁾なっていく型の人である。

その彼が先日来てくれたのである。女^{おんな}所^{なじ}帯^{たい}へ菓子折^{かしおり}をもらうことは珍しくないのだが、彼のみやげも菓子折だった。それが珍しい特別なことだったのだ。かつて彼が勤めはじめた店のものだったからである。その店は潰^{つぶ}れてしまったのだけれども、古い^{のれん}暖簾^{のれん}なので名だけは人が継いで残っていた。それを戦後買い戻して復活し、相当な繁盛を見せているという話は私も聞いていた。おみやげがそこの包み紙だと、一目見るなり私は困った氣持に押されて、ちょっと挨拶にとまどった。相手の氣持がいまさら⁽⁵⁾はか^{はか}測^{はか}りかねたのであった。「懐^{なつ}かしいと思ひまして……」彼はからりとして⁽⁶⁾いる。「それはまあ、一生のふりだしでしたから、あんなふう⁽⁶⁾に氣まずくあすこを出たのちも、この商標を見たり聞いたりするたびにむかむかすること、憂鬱^{ゆううつ}になることもありましたけれど、それももうとうの昔に私としては一応の清算はつけたつもりでした。だから、このごろまた復活したと聞くと、一度出かけて行って⁽⁷⁾自分の氣持を確かめてみたい。昔そこで売った菓子を今度は客で買って見、そしてどんな氣持がするか、はたして自分があのことにほんとうに思^{おんし}讐^{しゅう}を離れて平安な氣持になっているかどうか。……店へ入ったとき別にどうということもありませんでした。今風^{いまふう}なガラス張りのきれいな店で、以前と違って菓子を折詰^{おりづめ}にするとこころもガラス越しに全部客から見えるようになっていて、実に清潔です。店は息子の代でしょう、息子が帳場^{ちやうば}で何かしているのも

ガラスじきりに透^すけて見えていました。店員も昔とは待遇が大ぶ違っているようです。しかし折を包装紙で包む手順などは一々普通通りです。見ていて思わず、ああしてこうしてと心のなかの手がいっしょになって動きました。そして、毎度ありがとうございますと言われて、その包みを取ってうしろを向いたらとたんに、……変なものです。ああ、これは解けて行くなという気がしたんです。怨^{うら}みも忘れたと思っているのですから、自分でも矛盾したふしぎな気持でしたが、とにかく霜や氷が解けて行くあの感じだ⁽⁸⁾ったのです。道々考えてみれば、やっぱり解けたと思うからには凍りついたものがあるしるして、思えば何も言うまいとしてきたことが、それが凍りつきだったのかもしれません。氷の底にはまだまだいやな気持^{おど}が凝^{おど}んでいたようです。大体あそこへ行って試^{ため}そうと思ったのが^{おり}滓^{おり}が残っていたことでしょうか。……今度こそこれでほんとうにすっきりしたと思います。」

長年おさえつけて包んできた気持^{ため}を試^{ため}そうとして、あえて出かけて行き、出かけたそのことでは何の感情も起こらず、自分に無関係な店員の無感動に折を包むのを見て昔の自分が鮮やかに映り、その包みを持ってうしろをふりかえったとたんに、じんわりとはんとうの心が生きて動き出す、——私はこの人が、霜や氷が解ける解けかたに感じているのが、聴⁽⁹⁾いていて何とも言えずおもしろかった。実際彼にとっては、解けて流れてとどめなくなっただという意味が切実だったのだろうが、私には包むと解ける⁽¹⁰⁾とであって、解けてのち本来のものがそこに在るということに受けとれていたからである。包んだりっぱさと、しんに触れたうれしさとは、いずれをより快いとも言いがたいが、どちらかと言えば、私は心に触れたうれしさが特別なのである。

(幸田 文「包む」より、一部書き改めた。)

問1 下線部(1)「彼の見切り」の原因は、次のどれですか。

- A 店で働き続けても結局報われないこと
- B 店の経営状態がしだいに悪化していったこと
- C 主人や店員の間に摩擦があり、いさかいをしたこと
- D 店はしにせであるが、古くて封建的であること

問2 下線部(2)の「努力」は、どのような内容ですか。

- A 少ししか関係がないのに、作者への訪問をやめないこと
- B 自分の苦しみは語らず、作者への訪問を続けていること
- C 作者に怨みを持たずに、好意を忘れないようにすること
- D いい性格なので、訪問を欠かすべきではないと思ったこと

問3 下線部(3)は、どのような意味ですか。

- A つまらないことで辛いと思っていたことが、後になるとよく分かる
- B 辛いと思ったことが、後から考えると恥ずかしくなるものである
- C 時間をかけてみないと、自分の辛さの程度は分からない
- D 辛さを感じている時は、愚かということが分からない

問4 下線部(4)とは、どのような人ですか。

- A 辛いと感じることは愚かだと気づいて、成長していく人
- B だまって苦難に耐え、最後には尊敬されるようになる人
- C あまり自分の意見を言わないが、努力して社会で成功する人
- D 苦しみを経験し、くり返し考え続けることによって風格を増す人

問5 下線部(5)について、作者はなぜ困った気持ちになったのですか。

- A 彼が昔勤めていた店の懐かしいお菓子を、おみやげに持ってきたから
- B おみやげの包み紙が、昔彼に就職の世話をした店のものだったから
- C 自分からやめた店のお菓子を持ってきた真意がわからなかったから
- D 昔いやな思いをした店にお菓子を買に行くとはいくはずがないと思ったから

問6 下線部(6)は、どのような意味ですか。

- A 彼は全然心配していないように見える
- B 彼は何もとらわれていない様子である
- C 以前に比べて急に彼の態度が変わった
- D 彼は無理に明るくふるまっている

問7 下線部(7)で、確かめたかった「自分の気持」の内容は次のどれですか。

- A 店に対して自分は今でも腹を立て、怨む気持でいるか
- B 昔のことが、今はもう自分の頭の中で解決したか
- C かつて勤めた店に、客として行ったらどんな気持になるか
- D 昔、店に対して持ったこだわりを捨て去っているか

問8 下線部(8)について、この人が気づいた気持とはどんなことですか。

- A 解けてしまったと思っていた氷がまだ解けないで、底には水がよどんでいたこと
- B 店の中では店員の仕事を無感動に見ていたが、後ろを向いたとたんにそれが感動に変わったこと
- C 頭の中で解決したつもりのが、今ほぐれていくのをありありと感じたこと
- D 忘れようと努力してきた昔の仕事の手順を、心の中の手が全部覚えていたこと

問9 下線部(9)について、作者が「おもしろい」と思ったのはどのようなことですか。

- A 解けるを、心が奥のほうから温くなる意味だと感じていること
- B 解けるを、試した後でやっと納得する意味だと思っていること
- C 解けるを、固まったものが流れ出すという意味にとらえていること
- D 解けるを、やさしい気持があふれ出る意味で使っていること

問10 下線部(10)は、「包むと解ける」ということばについての作者の思いですが、作者の思いを簡潔に述べたものは次のうちのどれですか。

- A それまで隠れていた物が表面に現れたので、実際の形がよく見えるようになっていい気持だ
- B こだわっていたことが気にならなくなった時、はじめて生き生きとした姿が見えてくるのはすがすがしい
- C りっぱに見えたものがそれほどりっぱでないとわかって、中身に触れてみるほうがやはり安心である
- D いつまでもだまって問題を考えているよりも、すぐに正しい答えを出してもらったほうが落ち着く